

keratin 顆粒と思われる構造物が明瞭で、本細胞の上皮性由来が示唆された。5. ヌードマウスへの戻し移植では、原発巣に類似した腫瘍形成を認めた。

6. 培養筋細胞におけるアセチルコリンレセプターの形成と細胞骨格の特殊化について

詹 前澤 (千大)
嶋田 裕 (同・一解)

Erabutoxin b と horseradish peroxidase を用いてアセチルコリンレセプター (AChR) を染色した培養筋細胞の超薄切片を観察すると、AChR 存在部位の細胞膜下に密な構造物を観察することができ、この構造は細胞骨格と考えられた。フリーズフラクチャーディープエッジ法により筋細胞膜の裏打ち構造や筋細胞内の細胞骨格が AChR とどのように関係しているかを追究した。

7. 口腔領域の骨病変4症例のSEM的検討

熱田藤雄, 佐藤正喜, 高原正明
木村孝雪 (千大)
嶋田 裕 (同・一解)

今回我々は、主として骨病変に関して走査電顕にて観察し、以下の結果を得た。

melorheostosis は構造上 normal bone と大差はみとめないが、石灰化の程度は高いようであった。fibrous dysplasia と ossifying fibroma 共に立体的に骨梁の形成が、観察された。又 ossifying fibroma の方が、より多くの盆状の骨吸収像と隣接して骨添加像が認められ、形成された腫瘍性類骨の周囲に collagen 線維が、毛状放射状に認められた。

8. 最近7年間の口蓋裂患者の治療成績 —おもに言語障害について

尹 錫哲, 林 逸子, 熱田藤雄
大木保秀, 磯貝嘉伸, 木村孝雪
今井香樹 (千大)

最近7年間に当科で初回口蓋裂手術を施行した54例のうち、追跡可能な34例の咬合、言語について調査した。反対咬合は全症例の23.5%、手術年令1~2歳代の半数に認められた。手術年令1歳代のものには、ほぼ満足な言語成績が得られた。粘膜下口蓋裂は平均手術年令が6歳4カ月と高いためか、言語状態不良であった。今後、言語状態、鼻咽喉閉鎖機能、齶歯予防、心理発達検査、母親教育についてより早期のキメ細かい指導が必要と思われる。

9. 舌 lipoma の2例

池羽ゆかり, 森川裕一, 成川芳明
高原利幸, 甲原玄秋 (千大)

今回我々は、88歳女性と76歳男性の舌側縁に発生した多発性の脂肪腫を経験した。患者の主訴となった最も大きな腫瘍の摘出を行なった所、単純性脂肪腫の病理診断を得た。発生原因としては、高齢であること、内科的疾患にて加療中であることにより、内分泌の失調による代謝の影響が示唆された。また、1980年1月より1986年9月までの当教室での良性腫瘍のうち、脂肪腫の発生頻度を調査し、他の報告と比較検討し報告した。

10. 舌に生じた神経鞘腫の1例

鶴田淳子, 風間敏禎, 松田由紀子
田中治男, 三宅正彦, 堀 稔
工藤逸郎 (日大・歯・口外)

今回我々は、31歳男性の舌右側側縁部に発生した神経鞘腫の一例を経験したので報告した。

病理組織学的に Antoni A型の神経鞘腫と診断された。さらに S-100蛋白並びに NSE による免疫組織学的検討を加え、本腫瘍は Schwann 細胞由来であることを確認した。

現在、術後約4カ月を経過しているが、特に異常は認められない。

11. 最近経験した舌下腺腫瘍の2例

小村 健, 桜庭 裕
(千葉県がんセンター・頭頸科)

最近経験した舌下腺腫瘍の2例の概要を報告した。

症例1: 36歳, 女性, 多形性腺腫, 舌下腺・顎下腺全摘術施行。

症例2: 54歳, 女性, 腺様嚢胞癌, 両側頸部廓清術, 歯肉・口腔底全摘, 舌部分切除, 下顎骨辺縁切除を施行後, 前腕皮弁で再建。

当科での大唾液腺腫瘍106例中, 舌下腺腫瘍は3例と発生頻度は低い。口腔底小唾液腺腫瘍との鑑別を要す。

12. 3歳男子左上顎にみられた ameloblastic odontoma の1例

市川恵子, 宮吉正人, 大木保秀
小原正紀, 高原利幸 (千大)

今回我々は3歳男児の左上顎乳臼歯部に発生した